

『方便から真実へ 浄土真宗』より抜粋

① 自尊心じしんこんりゆうの心しんが自力じりきではありませんか。

解説Ⅱ自分の心で組み立てた御信心、お聖教を読み、お説教を聞かしていただいて、あのお経にはこう書いてある、あのお聖教にはああ書いてあると読んだ学問、知った知恵を集めて、なるほどそうか、私のための本願か、私を救うための御廻向かと、学問や智恵で組み立てて、これこれと学者は聚めたお聖教に腰を掛け、組み立てた御信心を、自心建立の心という自力の親玉があるのです。同行は聞かしてもらった文句を覚えて「たとえ罪業は深重なりとも必ず救うべし」と仰せられた、「生まるべからざる者を生まれさせたればこそ、超世の悲願とも横超の直道とも習いはんべれ」と書いてある、「真に知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるが故に龍華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし、念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」とお説教を聞くと、自分が横超の金剛心を

究めたように、自惚れているが、そう書いてあると披露しているだけです。

「たとい罪業は深重なりとも必ず救うべし」と、救われた蓮如さまがお書きになったので、あなたは読んでお言葉がありがたいので、あなたは罪業深重がどんなものやら、苦しいものやら知らないで、それで救われたつもりでいるのですから、自惚れを通り越しているのではありませんか。「生まるべからざる者を生まれさせたればこそ」とありますが、あなたは生まるべからざる者で泣いたことがありますか、生まれましたか、開発しましたか、晴れて大満足をしましたか。お説教を聞きにきたときは、あなたの本性は秘密の部屋で昼寝をしているのですよ。表に顕れている感情が、お言葉に調子を合わせているだけです。ありがとうございます。たいものは直ぐに消えてなくなっているではありませんか。お聖教の文句に調子を合わせているだけですから、心の本性が出てくると、今までいただいていたありがたい感情を、みな崩しているではありませんか。だから何年経っても、喜ばれないのです。あなたの本性が

阿弥陀様の狙いですのに、あなたはそれを包む稽古ばかりして、こうおっしゃった、ああおっしゃったと書いてあるものに調子を合わせて喜んでいるのを、自心建立の心といって、自分の心で組み立てた御信心で自力の親玉です。自分がそう思うたのではない、思わしてもらったのだ、といくら他力のように説明なさっても、二種深心が徹底しない以上は、他力の真似をしているのですから、人間は誤魔化しても臨終の関所は通れません。難中の難を突破していいのですから、あら心得やすくなっていません。極難信を通過していませんから、真の易さを知りません。もう一度お聖教を荷うて三悪道を見物しておいでにならねば、お聖教の裏に溢れている不思議の仏智は諦得できません。

② 信罪福心が自力ですか。

解説Ⅱ罪は恐ろしいから出さないようにし、福はありがたいから表に出してお説教を聞いているのが、みな自力です。今日はお説教を聞きにゆくのだと着物を着替えたときには、悪性の心は仕事着に包んで留守番さして、他所ゆきの心が表に出てお説教を聞いているのです。坊さんは実機を語ってくださる人はなく、三毒の煩惱は往生の邪魔にならないといっています。三毒の煩惱は邪魔にならなくても、疑いの煩惱が邪魔になるのです。この疑いが晴れたら、三毒の煩惱は御恩を喜ぶ因と変わるのです。

あなたの心は二つあることに気がつきませんか。他人の前で体裁を繕うて真面目そうで、他人によく見てもらいたいという心と、誰にも打ち明けられない、梃子に合わない代物とがおりませんか。これを上の心と下の心といたしましょうか。上の心は感情で猿、番頭に喩え、下の心は自性で牛、主人に喩えています。お説教を聞くときに、喧嘩をしようと思って聞くものは一人もいません。みな素直に聞こうとしているのです。悪い心は出さないように

して、有難うなろうと思つて聞いているのです。それが信罪福心という自力の変名です。悪

い心よ出てくるなよ、お前が出てくるとお慈悲を聞くのに邪魔になるから、出てくるなよ。

法を聞くと時には有難い心でなければ聞けないと、自分が勝手に決めて、素直な心で本願を

受け取ろうとしているのが、自力とは知らないでしょう。悪い心を出さないように包み抑

え、有難うなろうとする心が自力なのですよ。そうしなければ聞かれないではないか。そう

することが自力なのです。自力をしなければ他力の境地に進まれないのです。感情の猿が

御信心をいただくように手を広げているところに布教使が、その身そのままその機になりで、

悪い心を直せでないぞ、曲がつた根性を正せでないぞ、やりたい放題やりつらせ、飲みたい

放題飲み歩け、後を受け持つ親じゃぞよ、南無阿弥陀仏、なむあみだぶつ、ええ親じゃのう。

ずばらをこかすのをよい親のように思い、放縦無慚の者をお救いのように考えてはいませ

んか。感情で合点するのは番頭が調子を合わすようなもので易いが、自性の特牛牛の主人が

冠かんむりを曲まげては信仰しんこうを崩くずしているから、何十年間なんじゅうねんかされても晴はれた人ひとがいなかった。信しん前ぜん信しん後ごの水際みずぎわを語かたる人ひとがいなかった。凡智ぼんちの感情かんじようが合点がってんしたのと、感情かんじようの思おもいがみな尽つきて、仏智ぶつちの不思議ふしぎに摂取せつしゆされたのとの、真仮しんけの分際ぶんざいが明あきらかになった人ひとが一人もいないではありませんか。感情かんじようが名号みようごうに調子ちようしを合あわしているのが、自力じりきというところとがわかりませんか。悪い心わるいこころを抑おさえて善い心よこころになってお慈悲じひをいただくこととしているのが、信罪福しんざいふくの心しんをもつて本願力ほんがんりきを願求がんぐしている自力じりきなのです。

③定散じようさんの自力じりき心しん

解説じようⅡ定じようとは息慮そくりよぎ凝心ようしんといつて、慮おもをやめて心こころを凝こらすということで、雑念ざつねんを払はらうてよい心こころになる、散乱さんらんする心こころをやめて心こころを専注せんちゆうするという意味いです。散さんとは、廃惡修善はいあくしゆぜんといつて

悪^{あく}を廃^{はい}し善^{ぜん}を修^{しゆ}することで、身^{しん}口^く意^いの三^{さん}業^{ごう}にかかる悪^{あく}の行^{こう}為^いをやめて、十^{じゆ}善^{ぜん}業^{ごう}を励^{はげ}むのをいいます。その心^{こころ}で念^{ねん}仏^{ぶつ}するのを定^{じやう}心^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}、散^{さん}心^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}といっています。

定^{じやう}心^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}とは夜^{よる}の寢^ね覺^ぎめ、澄^すみ切^きった心^{こころ}のときの念^{ねん}仏^{ぶつ}、御^ご恩^{おん}のほどを思^{おも}い出^だして、これをた^{たり}きえこ^うし^{やう}み^{やう}他の力^{りき}廻^{くわい}向^{かう}の称^{しょう}名^{みょう}というのだらう、こんな清^きいな念^{ねん}仏^{ぶつ}の時^{とき}ころり死^しんだらお浄^{じやう}土^どに参^{まい}れるだらう、と思^{おも}うのが、定^{じやう}心^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}という自^じ力^{りき}の念^{ねん}仏^{ぶつ}です。仕^し事^{ごと}に追^おい立^たてられたときの念^{ねん}仏^{ぶつ}は有^{あり}難^{がた}うないから、墮^おちはせぬかと思^{おも}うのです。また、今^{きやう}日^{にち}は御^ご信^{しん}心^{じん}をいた^いた^だこ^うと構^{かま}えているとき、声^{こゑ}や節^{ふし}のよいお説^{せつ}教^{きやう}を聞^きき、感^{かん}激^{げき}したときの念^{ねん}仏^{ぶつ}のありがたさ、天^{てん}にも昇^{のぼ}る気^き持^もちの念^{ねん}仏^{ぶつ}のときは、これこれ、往^{おう}生^{じやう}は一^{いち}定^{じやう}なりと思^{おも}うでし^しよう。その反^{はん}対^{たい}の気^き持^もちのときの念^{ねん}仏^{ぶつ}は味^{あじ}がない、あな^なたの気^き持^もちのよ^よしあ^あしで往^{おう}生^{じやう}を決^きめか^かけてい^いるのを、定^{じやう}心^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}の自^じ力^{りき}とい^いうのですよ。

散^{さん}心^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}とは、悪^{あく}をやめて善^{ぜん}を修^{しゆ}する気^きで念^{ねん}仏^{ぶつ}をするのですから、布^ふ施^せの行^{ぎやう}をしたりとい

えば角張かくばっています、施ほどこをしたり寄付きふをしたり、拾ひろい物を届けとどけたりした気持ちきもちのよいと
きの念仏ねんぶつは、このくらいさしていただくから悪いところには行ゆかないだろう。その反対はんたいに、
拾ひろい物を猫バねこ決きめたり、喧嘩けんかしたりすれば、こんな心こころが出るようでは往生おうじょうはいかがかと
尻込しりごみをする、自分じぶんの心こころの善惡よしあしを往生おうじょうに引ひっ掛かけているのを散心念仏さんしんねんぶつといっている、こ
れを聖人しょうにんは「定散じょうさんの自心じしんに迷まようて金剛こんごうの真心しんしんに昏くらし」と叱しかっておられるのですが、坊さんぼうさんが
知らないのですから同行どうぎようが知る筈はずがありません。同行どうぎようたちはみんなこの程度ていどの信仰しんこうをうろつ
いているので、善ぜんも欲ほしからず悪あくも恐れおそれなしという善惡ぜんあくを超越ちようえつした念仏ねんぶつの独り作用ひとばたらきの境地きようちま
で到達とうたつしてはいないので。それはどこに欠点けってんがあるかといえ、機きを包つつんで法ほうばかり眺めなが
さしている第二十願だいにがんの桁けたにいるのですから、自分じぶんの善惡よしあしが氣きになるのです。二種深心にしゆじんしんが徹底てつてい
していないからです。三毒どくの煩惱ぼんのうが寝ねているときにはお慈悲じひがありがたいけれども、これが
頭あたまを挙げあげると、こんな心こころが出るようではひよつとと疑うたがいが頭あたまを出すから、墮おちそうになるの

です。真宗では自力も疑いも何にも知らないで、自分は自力を発したことなれば、疑うたこともないと平気でいますが、教えるお方がわからないのですから晴れる筈はありません。自力がつきなければ、他力不思議に到達しないのですよ。疑うたことのない人は、明信仏智の境地に趣入することはできませんよ。今あなたが自力をやりつつ、他力に向って前進しているですよ。まだ幼稚な信仰ですから疑いが出ていないのですよ。疑いなく堕ちたときに、疑いなく助かった世界が開けるのですよ。お進みなさい、進む道がわからないでしょう、まだまだあなたの信仰は贗物で、開発までには前途遼遠ですよ。腹が立ちましたか、腹が立った人は見込みがあるのです。腑抜けには奮発心がない、奮発心のない人は求道心が無い、求道心のない人は開発まで到達し切らない。

④ 計らうまいと思う心が自力です。

解説Ⅱ往生おうじょうほどの一大事いちだいじを凡夫ぼんぷが計はからうたと何なんになるものか、といっています。計はからわれないようにしようとしているのが計はからいではありませんか。聖人しょうにんは「ようように計はからいあうて候そうろうこそおかしき候そうろう」と仰おほせられてあるではないかと、僧侶そうりよは仏さまと遠く離れて無関係むかんけいのところにいる。対岸たいがんの家事を眺ながめているのだから気にかからないのです。このお言葉がどんなところに使用しようされてあるか御承知ごしやうちでしょうか。聖人しょうにんは後生ごしやうが一大事いちだいじになって二十カ年の修行しゆぎやうを棒ぼうにふり、百夜ひやくやの祈願きがんは血みどろの求道きゆうどうですよ。あなたは他力たうりきに胡坐あぐらをかいて、無力むりきを他力たうりきと間違まちがえて信仰しんこうに触ふれてはいないのですよ。一大事いちだいじの後生ごしやうになりましたか。後生ごしやうとは死し後の世界せかいのことではありませんよ。前滅後生ぜんめつごしやうといいまして、前の息まえいきは死しんでいる、後の息あといきが入はいらなかつたら次の世界つぎせかいだが、その用意よういはできたかということです。聖人しょうにんが「計はからうのが可笑おかしく候そうろう」とあるのだから、自分じぶんたちは計はからうたことはない、情けない信仰しんこうですね、それは後生ごしやうが気きにかからないのではありませんか。

聖人は求道すればするほど、自分に真実のないことに驚いて、何れの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住家ぞかしと、あのお言葉が出るときは、ぎりぎり舞いの三定死の苦しさですよ。すかされてもだまされても堕ちるより他に道がなかった、絶対の悪性を知らされたとき、絶対の法に逢われたので、法然上人にいわしたならば、極悪最下の機類が極善最上の法に摂取されたので、悪を悪と知らない凡夫が、素直に話を聞いているのとは桁が違うということがわからないのですかなあ。一朝一夕で極悪最下に氣のつくような柄ではないのですもの、それが無条件で摂取されるまでが調熟の光明で、果遂の誓いの上を前進さしていただいているので、摂取されたときに摂取の光明に生かされたので、聖人がこの一念を諦得された境地から、「ようように（様々に、ああじゃこうじゃと）計らいおうて候こそおかしく候」とは、馬鹿を馬鹿と知らないから智慧のある賢い者と自惚れて、ああじゃこうじゃと文句を並べてみたが、あきれた本願に逢うてみれば、計らいつきて親に計らわれてい

たことの愧しき、自分の智慧や修行が往生の助太刀になるように自惚れていたが、助けにもならず邪魔にもならず、自力がつきめて初めて他力不思議の広大なることに驚いた、無上甚深微妙の法に逢わしていただいて、初めて自力無効を知らされ、明信仏智の鮮やかさを諦得さしていただいたとの信念です。

真宗の道俗よ、計らわれないように敬遠しているのは無関係なのですよ。あなたの力で計らうてごらんなさい、計らいつきた時が親に計らわれていたことがよくわかります。

何年聞いてもはつきりせず、これでよからうか、どうなったのが信仰だろうか、どうしたら摂取されるのだろうかと気にかかるのが計らいの最中ですから、あなたの思慮分別がつきるまでお進みなさい、それを求道というのです。聖人のお言葉を覚えたのは、あなたの信仰にはなりません。聖人は、この道を通れば広い天地があると自分の通られた道を教えておられるのですから、お言葉の真似をしているのでは、あなたの奴性根は助かりません。

富士山の頂上を極めて降っている聖人と、今から登ろうと二、三合まで進んでいる人と、言葉の真似をしたって心境に大差のあることを知らねばなりません。

⑤ 今度聞いたらわかるだろうと力むのが自力の心

解説Ⅱ 浄土真宗は他力の教えだから、自力はないように思っておられましようが、開発するまではみな自力が引っ張ってくれるのです。信罪福の心で悪い心を出さないようにして、有難うなろう、話はわかる、理屈はわかる、どうも喜びがでない、どうしたらよいだろうか
と小首を傾けたことはありませんか。お慈悲が届いたら喜べそうなもの、何だか心の奥底に
気持ちの悪い心があるが、どうしたらよいだろう、こんど聞いたらわかるだろうか、こんどこそ熱心に聞いたらお慈悲が届くだろうか、とあせる心はいませんか。わかるように思っ

いるのが自惚れうぬぼというのですよ、そのあせる心こころが自力じりきですよ。凡夫ぼんぶの智慧ちえでわかるのは、
凡夫ぼんぶの世界せかいのことです。わかつう、わかつう、と引ひつ張ばつてくれるのが自力じりきです。聞きいても
知しつても覚おぼえても、それは人間にんげんの計はからいの智慧ちえの分際ぶんざいであつて、仏ほとけの世界せかいに通用つうようするものは
微塵みじんもなかつたと総すべてがつきたとき、他力たうりき不思議ふしぎに生いかされるのです。これを実地じつちの求道きゅうどうと
いうのです。みなさんは、こんな心こころはいませんか。私も求道きゅうどうしてるときには、自力じりきとも何なん
とも思おもわず、わからん、わからんとあせていましたが、開発かいほつした後のちに、あれが雑行ぞうぎようであつ
たのか、あれが雑修ざつしゆであつたのか、あれが自力じりきの心こころであつたのかと知しらされたのです。だか
ら先さきに通とおつた人ひとが、後のちの人ひとを指導しどうしなければならぬ。これを自信じしん教人きやうにん信しんというのです。
信前しんぜんのときには雑行ぞうぎよう雑修ざつしゆ自力じりきの心こころとも知しらず、念仏ねんぶつに向むいてこれが本ほん当とうじゃ、これが本ほん当とう
じやと思おもつて進すすんでいるが、その桁けたの上うへを前ぜん進しんしているので、一念いちねんの信しんで仏智ぶつちが満入まんにゅうして初はじ
めて知しらされるのです。

聖人^{しょうにん}が「真仮^{しんけ}を知らざるによりて如来^{にょらい}広^{こう}大^{だい}の恩徳^{おんどく}を迷失^{めいしつ}する」といわれたのが、信後^{しんご}に入^{はい}って危^{あぶ}ない芸当^{げいとう}をやっていたなあということが知らされるのです。